

## —あおぞら—

みなさまの情報発信の場として、本誌をご活用ください！

大気環境学会誌 編集委員長  
速水 洋

2014年9月より、大気環境学会誌の編集委員長を務めております。2年間、よろしくお願ひいたします。

新任の編集委員長が「あおぞら」で編集方針を表明するのが慣例になりつつあるようですので、編集委員会構成や審査体制と併せてご紹介したいと思います。

### 1. 編集委員会の構成

現在の編集委員会（裏表紙からめくってください）は、正副委員長と27名の編集委員から成ります。編集委員は2年毎に約半数が交代し、今回は12名が新任です。副委員長は前委員長の大河内博先生（早稲田大学）ですので、ちょうど正副委員長が入れ替わった形です。

### 2. 論文審査体制

投稿原稿受付後の流れと編集委員会の役割は、おおむね次のとおりです。

- ①委員長：編集委員の中から担当編集委員を指名
- ②担当編集委員：査読者を選定；判定案を作成
- ③正副委員長+担当編集委員：合議で判定確定

審査を公正に行うため、担当編集委員と査読者が誰であるかは編集委員会においても伏せられます。正または副委員長が著者の場合、正または副委員長は審査プロセスの一切から外されます。正副委員長が同一論文の共著になることは、想定されていません。

現在の審査体制は、審査の迅速化と判定基準の安定化を目指して2007年に導入されたものです（大河内，2013）。現編集委員会はこの審査体制を踏襲しつつ、学会・学会員と社会のニーズをみて改善していきたいと考えています。特に、「不採用（再投稿を期待）」判定は審査の迅速化と判定の明快さを目指して導入されましたが、再投稿を期待されても著者にとって「不採用」はショックとの声や、再投稿されぬまま期限の3ヵ月を過ぎる原稿が少なからずある（もったいない！）のも事実であり、要検討事項と考えています。

### 3. 今後の編集方針

基本的にこれまでの編集方針を踏襲しますが、少しだけ付け加えさせていただきます。

#### ●成果を社会に還元する場としてご利用ください！

研究者（特に、本学会の）は、ご自身の研究業績を上げるとともに、成果を社会に還元することが重要と思います。本

誌は国内随一の大気環境学術誌です。ゆえに、わが国の大気環境保全に取り組む産官学の研究者・技術者、国・自治体の環境行政担当者、メーカー・コンサルタントなど様々な方々に、直接インパクトを与えることができます。それらはきつと、業績として著者に戻ってくるはずですが、本誌で扱う研究論文には、原著論文、ノート、速報、技術調査報告があります。完成度や速報性に応じて成果の還元にご利用ください。

なお、韓国大気環境学会と合同で発行するAsian Journal of Atmospheric Environment (AJAE)は、中国との連携も考えているようです。東アジアの大気環境保全に関する成果発表にはAJAEをご活用ください。

#### ●「技術調査報告」をご利用ください！

技術調査報告は、「大気環境研究に関する測定技術、調査結果など、その知見が大気環境に関する研究として貢献すると判断される」研究論文の一種です。

ちゃんと計画したけど条件に恵まれず観測データが眠っている；長年の観測データが貯まっているが解析が進まない；たったひとつの分析／観測／計算条件を決定するために実験を重ね試行錯誤した、なんてことはないでしょうか。そのままでは原著論文になりにくい、もしくは「方法」にたった1行で済まされてしまうものかもしれません。ご本人にしてみればラボ・ノートに書いてあれば十分なものかもしれません。でも、技術調査報告として公表されれば、誰かの役に立って大気環境保全につながる可能性が生まれるのです。

自治体の研究機関の方など、年報を書かれる方も多いと思います。年報には貴重なデータが載っていることがあります。探し出すのは容易ではありません。そこで、少し膨らませたり数年分をまとめたりして、技術調査報告として公表していただけないでしょうか。

編集委員会は、「大気環境科学・工学の進歩に何らかの貢献をする研究成果であれば基本的に採用」します（大原，2009）。そして、成果発表の場として本誌をお選びいただいたからには、少しでも良い形で会員のみなさまにお届けできるようサポートする所存です。

みなさまからの投稿を心よりお待ちしております！

### 参考文献

大河内博：あおぞら，大気環境学会誌，48(1)，(2013)。

大原利真：あおぞら，大気環境学会誌，44(2)，(2009)。